「であろう」は婉曲表現か

—客観的真理追究型テクストにおける使用を中心に—

蓮沼　昭子（創価大学文学部）
hasunuma@soka.ac.jp

【要約】

学術的文章の指導書では、「ダロウ」を「明言回避」「主張の責任回避」の婉曲表現と捉え、その使用に否定的な意見が述べられることが多い。しかし実際の論文や論説文を観察すると、書き手が自らの結論・見解を述べるような場合に「ダロウ」はかなりの頻度で使用されており、しかもそこに婉曲的なニュアンスは認められない。本稿では、「と言える」に代表される、客観的妥当性を承認する標識に「であろう」が付加された例を採集し分析を行った結果、「であろう」は、自らの結論・見解を述べる際の専門家としての書き手のスタンスを明示するものであり、「明言回避」「主張の責任回避」とは無縁の表現であることを明らかにした。

１．はじめに

「ダロウ」「カモシレナイ」「ヨウダ」「ラシイ」[1]などは、話し手が直接的な知識を持たない事柄を、推量・推定して述べる「推量表現」に一括されることが多い。そして、断定可能な判断の文に付加された場合、これらは独断的な主張を控え、判断を婉曲的に述べる「婉曲用法」をもつとされる。学術論文作法の指導書では、「ダロウ」を主張を明言しないぼかし表現、主張の責任を回避する表現として、その使用に否定的な意見をしばしば見かける（Leggett1966、木下是雄 1981 など）。

だが、実際の学術論文や論説文の文章を観察すると、その道の専門家が自らの判断・見解を開示する際に「であろう」「だろう」はかなり頻繁に用いられており、やや権威的なニュアンスが認められる。話しことばにおいては、丁寧体の「でしょう」の待遇価値は必ずしも高いとは言えず、推量用法であっても、目下からは目上には使いにくい。確認要求の用法では待遇度が特に低くなるため、目上に対しての使用は不適切となる（中北 2000）。また、「でしょう」を言い切りで使うと、聞き手の考えを無視してまで断定しているというニュアンスを持ちやすく（安達 1997）、「でしょう」で言い切ることができるのは発話者が専門家などの場合に限られるとされる（庵 2009）。こうした先行研究の指摘や、「ダロウ」のもつ権威的なニュアンスを考慮すると、「ダロウ」を「ぼかし表現」「明言回避」の表現とし、その使用を否定的に捉える学術論文の指導書の指摘は、再検討の余地がある。

本稿は、以上の問題意識から、論文や論説など「客観的真理追究型テクスト」（森山 2000）で使用される「であろう」[2]を取り上げその機能の再検討を試みる。具体的には、「～と言える」などの「客観的妥当性を承認する標識」（森山 2000）に「であろう」が付加した場合の例を観察し、こうした例において「であろう」がもたらす表現効果やその意味・機能について、従来とは異なる見方を提起し

---

[1] 本稿では、その形式の代表形であるレンマ（見出し項目）を片仮名表記で、具体的な出現形を平仮名表記で示す。

[2] 「ダロウ」には、「であろう」「でしょう」「でしょ」「だろう」「だろ」などの文体的バリエーションがあるが、「であろう」は、確認要求の用法をもたない点で他と異なる。

たい。

２．問題の所在

学術論文における「ダロウ」の使用に対する否定的な意見の代表的なものとして、Leggett（1966）がある。Leggett は、日本人物理学者の書いた英文校閲を担当した英国人の物理学者で、「であろう」を英語に翻訳不可能なぼかし表現として、学術論文で避けるべき文末表現の第 1 に挙げている。以下は、ロゲルギスト K2 [3]（1974）、木下（1981）による紹介を参照しつつ、Leggett(1966)の主張を整理したものである。

1. 「であろう」「といってよいのではないかと思われる」「と見てもよい」は英語に翻訳不可能である。(It is almost hopeless to try to translate phrases like ～ into English…)
2. 〈ぼかした〉かたちで自分の意見を述べたとすると、欧米の読者は、著者の考え方が支離滅裂（muddled thinking）だと思うだけである。
3. 「であろう」は「である」に変えるべきである。
4. 「といってよいのではないかと思われる」「と見てもよい」などは、すべて削ってしまうべきである。
5. 「ほかにも可能性があることを無視して自分の考え方を読者におしつけるのは図々しい」という日本人の床しさ・遠慮深い考え方の現れである。
6. 「であろう」に相当する言い方を見つけたいというなら、〔We may say that……〕（may の第２の用法）が近いが、「である」とぶっきらぼうに言い切ってすましているほうがはるかにいい。

「であろう」等の表現に対する Leggett の見解は、木下（1981）では、いっそう明示的な形で述べられている。すなわち、「デアロウ」「ト言ッテヨイノデハナイカト思ワレル」「ト見テモヨイ」や「ト思ワレル」「ト考エラレル」のような表現は、「当否の最終的判断を相手にゆだねて自分の考えをぼかした言い方」であり、「〈はっきり言い切る〉たてまえ文書では、こういうあいまいな、責任回避的な表現は避けて、『自分は……と思う』『……と考える』と書くべきである」（木下 1981：98-99）という。つまり、Leggett(1966)の主張を継承し、「はっきり言い切る」西洋流儀の姿勢を、日本人の言語習慣に確立させる必要性を説いているわけである[4]。

ところで、Leggett（1966）、木下（1981）の主張とは、一見矛盾していると思われる現象がある。すなわち、英文を翻訳した場合に、原文にはない表現として「ダロウ」「ト言エル」などが付加される現象で、以下がそうした例である。(1)は、Langacker の著書の「序文」の最後の文だが、(2)はその

---

[3] 「ロゲルギスト K2」は木下是雄のペンネームである。

[4] 学術的文章表現の指導書では、Leggett（1966）の見解をそのまま採用していると見られる記述が多い。以下は、大学のレポート作成の手引きで、避けるべきものとして挙げられている、あいまいな表現の例である（×のついた文から、○のついた文に書き換えるべきだとされる）。

×今後も少子化は進行していくかもしれない。→　○以上の理由から、今後も少子化が進行していくと考えられる。

×犯罪行為については、貧困などの環境的な要因が根本的な原因だろう→　○犯罪行為については、貧困などの環境的な要因が根本的な原因である。（創価大学学習支援センター（2014）「レポート作成の手引き」）

日本語訳である。

(1) The future is harder to predict than the past, but it does seem clear that---even after thirty years---research in CG is only starting. (Langacker(2008) *Cognitive Grammar: A Basic Introduction.* Oxford University Press. 下線の付加は蓮沼)

(2) 認知文法の研究は(すでにその誕生から30年以上を経ているが)、明らかに次のステップへの始まりにすぎないと言えよう。

(山梨正明監訳 (2011)『認知文法論序説』研究社。下線の付加は蓮沼)

(2)の文末には、「と言えよう」(＝と言えるであろう) が使用されているが、原文にこれに該当する表現はない。原文に忠実であろうとすれば、(2)は「始まりにすぎない」と言い切ってよいはずなのだが、なぜか翻訳者は「と言えよう」を付け加えている。しかも、この場合の「と言えよう」に「独断の緩和」「明言回避」といった意図は読み取りにくい。

また類例として、森山 (2000) に以下のような例がある。英語の原文にはない「と言える」が、日本語訳で使用されているケースである (森山2000：注13。下線の付加は蓮沼)。

(3) (略) and hence the performative prefix *I VERB you* ... will always be informative to some degree or other. (Leech(1983) *Principles of Pragmatics*：216. Longman)

(4) (略) 従って、私はあなたに (動詞) するという遂行文の文頭に用いられることばは、常にある程度情報提供的であると言える。

(池上嘉彦・河上誓作訳 (1987)『語用論』:308 紀伊國屋書店)

(2)(4)の和訳で、原文(1)(3)にはない「と言えよう」「と言える」を翻訳者が付け加える動機・意図は「独断の緩和」「明言回避」とは別のもののように思われる。森山(2000) によれば、「と言える」は、「話し手が構築した主張や表現について、その客観的妥当性を承認する標識」(森山2000:64) とされる。つまり、「と言える」は「客観的妥当性を付与」するメタ的表現であり、自らが構築した主張であることを明示するために使用される標識で、それまで述べた基礎となる情報を統合したり別の観点からの位置づけを行うような場合は、基本的にその使用が必要となるとされる。

「と言えるであろう」は、その道の専門家が、データや自らの専門的知識を検討したうえで妥当性のある結論として、自らの判断・主張を述べる際に用いられることが多く、ここでの「であろう」を「あいまい表現」「ぼかし表現」として、学術的文章から排除しようとする考え方には、再検討の余地があるといえるのである。

本稿では、「ダロウ」を「明言回避」「主張抑制」の婉曲表現と捉える従来の説を見直し、新たな観点からその機能の捉え直しを試みることにしたい。

３．先行研究

ここで、「ダロウ」の基本的意味・機能に対する先行研究を紹介し、「ダロウ」に対する本稿の捉え方と分析の観点を説明しておきたい。

「ダロウ」の基本的意味・機能に対する見解は、大きく分けると3つの異なる立場がある。便宜的にそれぞれを「断定保留」説、「判断形成過程」説、「推量」説と仮称し、その特徴を整理しておきたい。

まず、「断定保留」説をとる代表的な研究は、森田 (1980)、益岡 (1991、2007) である。断定保留

とは、「真であるとの確信がもてなかったり聞き手との関係で断定を差し控えたりといった事情で断定を保留するもの」（益岡 2007:144）で、そうした特徴づけによって「ダロウ」を捉える立場である。

次に、「判断形成過程」説は、森山（1992、2000）の説で、「ダロウ」の機能を、談話現場における「判断形成過程」（確定的な結論に至っていない、考え中であるということ）を表示するものと捉える立場である。森山は「ダロウ」を、「カモシレナイ」「ニチガイナイ」「ヨウダ」などの「推量」の形式には含めず、推量の形式とは認めていない。「ダロウ」は疑問文にも出現し、確認要求の用法をもつのに対し、推量の形式はそうした用法をもたないことがその主たる根拠とされる。

3 つ目の「推量」説をとる代表的な研究としては、奥田（1984）、仁田（1991、2000）、大鹿（1993、1995、2004）、三宅（1995）、宮崎（2002）、日本語記述文法研究会編（2003）などがある。細かい点での差異はあるものの、「推量」を、思考・想像といった間接的な認識によって命題内容が真であると判断するという特徴づけで捉えている点で、共通項が認められる。「推量」を表す形式としては、「ダロウ、ウ／ヨウ、マイ」などが挙げられている。

本稿では、「ダロウ」の基本的意味・機能を「推量」と捉える、第 3 の立場を採用し以後の考察を進める予定である[5]。実際の分析に入る前に、「推量」説の立場をとる宮崎（2002）における「ダロウ」の位置づけを確認しておきたい。

宮崎は、述語の無標形式と「ダロウ」が、共に疑問・非疑問の対立を有する点に着目し、「ダロウ」を基本叙法に匹敵する基本的な形式と捉え、そのパラディグマティックな対立関係を次の表のように整理している。

	確認	推量
断定	する	するだろう
疑問	するか	するだろうか

〈断定〉とは命題内容の真偽について話し手の判断が定まっているという非疑問の形の意味（＝判断成立）であり、「か」を後接させその真偽を疑う〈疑問〉がこれと対立している。〈確認〉とは、話し手が直接確認したこととして命題内容が真であると判断するもので、無標形式の表す認識的意味である。一方、〈推量〉とは、想像・思考という間接的な認識によって命題内容が真であると判断するもので、「ダロウ」の表す認識的な意味である。無標形式と「ダロウ」の間には、並行的に疑問と非疑問の対立が成立することにより、上記の表の十字分類が成立することになる。

(1)　レポートは今日中に｛書ける／書けるだろう｝。

(2)　レポートは今日中に｛書けるか／書けるだろうか｝。

宮崎（2002）において、取り分け重要な指摘は、〈断定〉に無標形式と有標形式の 2 種を区別し、〈確認〉における〈断定〉と〈推量〉における〈断定〉の 2 つを設定している点である。つまり、「ダロウ」は、思考・想像という間接的認識によって導き出され、結論の段階に至った話し手における判断の成立、すなわち〈断定〉を表していると捉えられているわけである[6]。

---

[5] 3 つのうち、「推量」説を採用する理由についての議論は、ここでは省略するが、以後の考察の過程である程度その理由が見えてくるような形で議論を進めたい。

[6] 宮崎（2014）では、この考え方をさらに進め、「ダロウ」を「断定形」（無標形式）と対立する「認識的ムード」としての「推量形」に位置づけている。そして、「ダロウ」は形態論的なムードの表現であるとともに、命題的モ

４.「ダロウ」は婉曲表現か

この節では、婉曲表現の捉え方をめぐる先行研究を紹介し、「ダロウ」が婉曲用法をもつとする見方の妥当性について検討を加えたい。

４－１．婉曲表現とは

仁田（1992）によれば、婉曲表現は、以下の 2 つの要件を満たすような表現のことを指し、基本的に丁寧さといった伝え方に関わる現象だとされている。

① 話し手は言表事態の成立が真であると認識している。

② 言表事態が未だ確認されていないところを有するものとして表現されている。

仁田によれば、婉曲表現の中心をなすのは「ヨウダ」であり、「ラシイ」で該当する例は多くないとされる。また、婉曲表現の特性として、〈対話状況〉でしか用いられず、心内発話や独り言では「ヨウダ」は婉曲を表せず、「徴候のもとでの推し量り」でしかありえないとされる。

以下の (1)(2)が婉曲表現の例で、(1)は、予定の時刻が過ぎているのを自らの時計で確かめておきながらの発話、(2)は、「奥さんがもう一千万円ゆすられている」ことを真であると認識している話し手が、表現の上で確言を避けて述べている場合である。

(1) 時刻になったようですので、本日の会議はこれでお開きにしたいと思います。

（仁田 1992：7）

(2) 「乃田の奥さんは誰かにゆすられているんだよ。一千万円もゆすられたらしいよ」（同：8）

４－２.「ダロウ」は婉曲表現か

宮崎（2002）は、「だろう」が〈婉曲用法〉として使用される 2 つの場合を指摘している。その 1 つ目は、〈主観的評価〉に「だろう」がついた場合で、(3)がそうした例である。

(3)（月光で砂に写った自分の影について）その影も短いのがいいだろう。（宮崎 2002:133）

(3)は、〈主観的評価〉を表す「いい」が使用されている場合だが、ここでは、〈推量〉から主張の強さを抑制する〈婉曲用法〉へと、「だろう」の機能に変更が起こっており、その理由は〈主観的評価〉の内容は話し手の中で決まる事実であり、推量の対象とならないからだとされる。

2 つ目は、(4)のような例で、主観性の強さや独断的なニュアンスを抑えるために「だろう」が用いられているとされる。

(4) これら三つが、自信喪失の言わば外部要因と言えるだろう。これに加えて、「夢」に対する幻滅という内部要因がある。 （藤原正彦『若き数学者のアメリカ』、宮崎 2002:136）

次の(5)(6)は、日本語記述文法研究会編（2003:149）で「主張を控えめにする断定回避」の「だろう」の用法に挙げられている例だが、(4)の類例として扱えるものである。

(5) 君はもっと努力すべきだろう。

(6) 今回の作戦は失敗だったと言えるだろう。

ここで生じる疑問として、(3)～(6)における「だろう」に、果たして「主張抑制」「断定回避」のニ

ダリティであるモーダル・システムのメンバーでもあるとしている。ちなみに、高山（2014）は、「推量」を広義の〈推量〉と狭義の《推量》に分け、現代語の「ダロウ、（ウ、ヨウ）（マイ）」を狭義の《推量》に位置づけている。広義の〈推量〉には、上記の《推量》の形式、および古代語の《推定》に対応する「ラシイ、ソウダ（様態）、ヨウダ、カモシレナイ、ニチガイナイ」などが入るとされている。

ュアンスが本当にあるのかということである。この点を、(5)(6)から「だろう」を取り除いた(7)(8)を用い、(5)(6)との相違を観察してみよう。

(7)　君はもっと努力すべきだ。

(8)　今回の作戦は失敗だったと言える。

これはあくまでも個人的な印象に留まるが、(5)(6)が(7)(8)よりも「控えめな主張」を表しているようには、筆者には感じられない。また、「だろう」を丁寧体の「でしょう」に変えた、次の(5')(6')でも、婉曲的なニュアンスは弱く、むしろ上から目線の尊大な態度が感じられる。一方、「ダロウ」の代わりに、「かもしれない」「と思う」を使用した(9)(10)では、主張緩和の効果が生まれているように感じられるのである。

(5')　君はもっと努力すべきでしょう。

(6')　今回の作戦は失敗だったと言えるでしょう。

(9)　君はもっと努力すべき｛かもしれない／だと思う｝。

(10)　今回の作戦は失敗だったと言える｛かもしれない／と思う｝。

以上の観察から、「ダロウ」が〈婉曲用法〉をもつとする見方に対しては、さらに注意深く観察する必要性が残されているように思われる。

４－３.「ダロウ」の使用の適否を左右する要因

ここで、「ダロウ」の使用の適否に影響を与える要因を整理し、「ダロウ」が〈婉曲用法〉をもつとする見方の妥当性について検討を加えたい。以下では、先行研究の指摘を参考に「ダロウ」の使用が適切な場合と不適切になる場合の例を対照させ、その使用の適否を左右する要因を箇条書きにして整理しておきたい。いずれの項目も、話しことばにおいて推量用法として使用された「ダロウ」の例に対する記述である。

１）社会的上下関係において、目下から目上には使いにくい。(庵 2009)

(11)　教師「田中君、どこにいるか知らない？」

学生「図書館｛??でしょう／だと思います｝」

２）言い切りでの使用は、話し手が専門家である場合に限られる。(庵 2009)

(12)　天気予報士：明日は快晴で行楽日和になる｛でしょう／??と思います｝

３）聞き手よりも明らかに話し手が詳しい情報を有していることが明らかであって、聞き手に求められている情報をある種の責任をもって伝えるような文脈において使用される。(三宅 2010)

(13)　明日の近畿地方は、全般的にぐずついた天気になる｛でしょう／＃にちがいないです｝

４）言い切りで使用すると、聞き手の考えを無視してまで断定しているというニュアンスをもちやすく、それを回避するためには、「ね」「と思う」などの付加が必要になる。(安達 1992)

(14)　江夏「もし去年までの野茂君やったら、同じような行動をとっていただろうか……」

野茂「うーん、とってる｛??でしょう／でしょうね／だろうと思います｝」

５）考慮が必要な文脈では適切だがその必要がない場合は不適切になる。(三宅 2010)

(15)　(考慮をめぐらす必要がない文脈)

Ａ「ちょっとペン貸して」

B「いいよ／#いいだろう」

(16)　(考慮を経て当然な文脈)

A「必ず返しますから、百万、貸してください」

B「うーん。#いいよ／いいだろう」

6）主観的評価や直接的知覚を表す述語には付加しにくく、付加した場合、尊大なニュアンスが生じ不適切になりやすい[7]。(蓮沼の観察)

(17)　母「この服どう？」

娘「ちょっと派手｛かも／みたい／じゃない（かな）／だと思うけど／??でしょう｝」

(18)　(新発売の青汁を試飲後)

A「お味、どうですか？」

B「意外とおいしい｛かも／みたい／んじゃない（かな）／と思う（けど）／＊でしょう／＊だろう｝」

以上、1）～6）の記述をまとめると、「ダロウ」の使用者は、社会的に聞き手よりも上位の人物や、その道の専門家などであり、そうした人物が使用する場合は適切だが、目下から目上に対しては使用しにくいということが指摘できる。また、「ダロウ」が使用される文脈は、考慮が必要な文脈、あるいはある種の責任をもって話し手が判断や情報を伝えることが要請される文脈である。主観的評価や直接的知覚を表す述語には、そもそも「ダロウ」は付加しにくいものだが、付加した場合には、尊大なニュアンスを生じやすい。つまり、上記のいずれの場合においても、「ダロウ」に「主張の抑制」「断定回避」のニュアンスは認められず、「ダロウ」が〈婉曲用法〉をもつとする見解には否定的にならざるを得ない。これがこの節の観察から導かれた、本稿における当面の結論である[8]。

４－４.「と言える」類に付加された「であろう」の機能（仮説）

２節において、森山（2000）の「と言える」の考察を簡単に紹介したが、以下では「客観的妥当性を承認する標識」の範囲を拡張し、「と言える」および「と｛言って／見て／考えて｝（も）よい」「と｛言う／見る／考える｝べきである」「と考えられる」などに「であろう」が付いた例の観察を行う。便宜上、上記の諸形式を「と言える」類と仮称し、これらに「であろう」が付いた場合の機能、およびその表現効果に対し、以下の仮説を立てその検証を試みることにしたい。以下の箇条書きでは、「書き手」を包含する語として「話し手」を用いる。

1. 「と言える」類は、話し手が構築した主張や表現について、その客観的妥当性を承認する標識である（cf. 森山 2000)。
2. 「と言える」類に続く「であろう」は、自らが構成した判断・主張が、十分な検討・検証を経

[7] この項目で使用している例文(17)(18)では、ワンプラディット（2008）の例文を部分的に借用している。ワンプラディット（2008）は「かもしれない」の婉曲用法を考察したものだが、「かもしれない」の用法を２種に分け、それぞれを「かも 1」「かも 2」と呼んでいる。「かも 1」は可能性を表す認識的用法であるのに対し、「かも 2」は直接経験に基づいた話し手の評価的判定を表す場合の用法で、断定を控える婉曲用法とされる。(17)(18)における「かも」は、婉曲用法の「かも 2」の例である。

[8] 「カモシレナイ」「ヨウダ」「ミタイダ」が〈婉曲用法〉をもつのに対し、「ダロウ」にはそれが認められない理由については、稿を改めて論じたいと思う。

た結果の結論・見解であるという意味を添える。

3. 「であろう」は、専門家としての話し手のスタンスを表示し、自己イメージを演出する効果をもつ。その文体的特徴により、「であろう」は「だろう」よりもいっそう明確に、その分野の専門家としての話し手の立ち位置を打ち出す効果をもつ。
4. 上記 3 の文体的特徴により、「であろう」は、「勿体ぶっている、しかつめらしい、偉そうだ」といったニュアンスを伴いやすい。代わりに「と思う」「かもしれない」などを使用した場合は、そうしたニュアンスは消える。
5. 以上の特徴から、「と言える」類に付加された「であろう」を、話し手の明言回避、主張の抑制を表す婉曲表現と捉えることは適切とはいえない。

５．客観的真理追究型テクストで使用された「であろう」の分析

「現代日本語書き言葉均衡コーパス」を検索し、そこに出現した「と｛言える／言って（も）よい／言うべき｝であろう」「と｛見て／考えて｝（も）よいであろう」「と見るべきであろう」の形をとる例を一例ずつ挙げ、そこに見られる「であろう」の働きの特徴を指摘しておきたい。例文を観察すれば明らかだと考えられるので、その列挙に留め、1 例ずつ取り上げての解説は省略する。

ここで結論を先取りして述べれば、以下の例では、「であろう」の前に客観的妥当性を承認する標識が使用されており、それによってデータを検討したうえで書き手が構成した妥当性を有する結論であることが明示されている。そして、それに付加された「であろう」は、こうした主張を述べる際の、専門家として判断の責任を引き受ける書き手の姿勢や、検討を加えたうえでの妥当な結論であることを保証する書き手の態度を表していると考えられる。つまり、ここでの「であろう」は「明言回避」「主張の責任回避」とは無縁なものだといえるのである。

英文の専門書の日本語訳で、原文にはない「と言える」「と言えよう」が付け加えられる理由も、「であろう」の働きを上記のようなものとして捉え直せば、日本語の学術的文章の文体的な要請の結果として生じる、ごく自然な現象であることが理解されるのである[9]。

(1)　さらに注目すべきことは、ギブソンが明らかにして(ママ)、知覚における「アフォーダンス」である。「アフォーダンス」とはギブソンの造語であるが、環境が動物に提供するもの、用意したり備えたりするもの、という意味である。例えば、崖はそこからの落下を、障害物は衝突を、開口部は通り抜けを、鋭い石片は切ることを、とがった石や骨は突き刺すことを、アフォードするとされる。つまり、動物や人間の知覚は、環境中の事物が主体にとってもつ意味や価値を直接に知覚するとされるのである。

　これらの多くの事例は、人間の知覚が主体と環境中の事物との相互作用の中で、対象を反映する活動であることをよく示していると言えるであろう。（牧野広義『哲学と知の現在』）

(2)　北京の旧城内、安定門の近くに雍利宮というラマ教の寺院がある。ここにはいわゆる歓喜

[9] 石黒（2007）は、論文で好まれる主張をまとめる表現として、①自発表現「思われる」など、②受身表現、③可能表現「言える」など、④推量表現「～よう」「～だろう」「～であろう」「考えられよう」「求められよう」「言えよう」⑤否定表現「せざるをえない」など、⑥帰結表現「のである」など、を挙げ、①～⑥に共通する特徴として、断定を避け、論理的必然性を高める点を指摘している。これらを使用することにより、書き手である「私」を主体の座から引きずりおろし、「私を消す」論文らしい文体が可能になるとされる（石黒 2007:246）。

仏もいくつかある。司馬遼太郎も北京を訪れたとき、おそらくここで歓喜仏に体面したことだろう。あるいはモンゴルのラマ教の寺院であったのか。その印象が強かったのか、司馬遼太郎はラマ教を性欲崇拝の宗教として誤解している。ラマ教は確かに一時期、左道化したことがあるが、ツオンカパが十六世紀に堕落を排除し、現在に残る黄帽派の戒律主義に回帰している。

密教が、その源流の地であるインドにおいて空海のこの時期にはすでに衰弱し、かわって猥雑な民間信仰と習合したバラモン思想―インド教―がさかんになりつつある。それにつれてインドにおける密教は変容し、インド教に似て性欲崇拝の濃厚なものになり、やがてチベットへ伝わり、ラマ教になるのだが、ラマ教は密教という点では空海が遺した真言密教とのちがいは無いといっていいであろう。　　（篠原令『もうひとつの「空海の風景」』）

(3) ～ピアノを弾くための機械システムが二つ示されている。上の図は、人と同じような指づかいでピアノを弾くことができるロボットである。これには、かなりの知能を持たせる必要がある。一つ一つの音に対して、腕を素早く、正確な位置へ移動させ正しい指を下ろさねばならない。手の部分には、指を動かすためのモータなどが入っていてかなりの重量なので、正確な位置で腕を止めるためにはどれくらい前からブレーキをかけ始めるかを考えなければならない。したがって、この機械を動かすためのプログラムは、そのことを考慮して作成する必要があるのでかなり難しい。一つ一つの音に対して、この考慮が必要なのである。

一方、下の図は、まさに自動機械で、人間の腕や指とはまったく異なった構造であるから、人間の弾き方とはまったく異なる。しかし、ピアノから出てくる音は同じである。あきらかに、動かさねばならない部分は少ないし、故障も少ないだろう。上の図にくらべて、早い曲も弾き易い。オートメーションで活躍する機械は、このような設計思想に基づいて作られている。すなわち、早く、安く、間違うことなく、生産に役立つことが使命である。工学的な機械設計の思想から言うならば[10]、この方がすぐれていると言うべきであろう。

（三浦宏文『ロボットと人工知能』）

(4)　供給はやみくもに増やせばよいというものではない。必要とされるモノを必要とされる時に供給しなければならない。場合によっては供給が先行することもあり、それによって需要がかきたてられることもある。

需要が出てきてからモノを作りはじめるとはかぎらない。あらかじめ需要を予想して作られる場合も多い。そのために結果として需要と供給が合致するとはかぎらない。時によっては双方にすれ違いがあって、モノが不足したり売れ残ってしまう場合がある。無駄が発生する。

無駄を排除するために計画的に作りたいと誰もが考える。ここに計画経済の発想が現れる。無駄を取り除く点では計画経済が最も効率がよいように思われる。ところがそれには前提があり計画が万全でなければならない。実際には的確な予想はほとんど不可能である。結論からいえば計画経済を目指した社会主義経済は完全な失敗に終わったと見てもよいであろう。

（水谷研治『「縮小均衡」革命』）

[10] 波線を付した部分は、森山（2000:68-69）において「情報の組み替えを宣言する」表現とされるもので、こうした表現が用いられた場合は、基本的に「と言える」が必要になるとされる。

(5)　援助交際を独りでこっそりとしてお金を貯めている少女など、まずいないだろう。彼女たちは必ず仲間をもっている。その仲間を守りにして「荒れ」ているのである。麻薬も不思議な一体感を感じさせる力をもっている。麻薬を仲間で吸引することによって、彼らは「仲間意識」によって守られていることを強く感じる―と言っても、まったく一時的なことであるが ―のである。

このような「遊び感覚」的な少年少女たちは、自分の心のなかに生じていることが何かわからないまま、それを反抗という形にもっていく力もなく、逸脱しているので、ときには、大人がしっかりとした血の通った壁として前に立つと、あっさりと普通の状態に返ることがある。思い切った叱責が成功する。しかし、これがいつも通用するとはかぎらない。

彼らのなかには、「守り」のなさに絶望しているような子がいる。そのような子どもに、大人が守りとなり得ることをわかってもらうのは大変だ。叱責してもそっぽを向くか、よけいにひどいことをするだろう。ときには、大人の言うことを聞き入れて、よくなったなどと思っていると、とんでもない「裏切り」にあう。しかし、これは、裏切りなどではなく、大人の守りがどれほど本物であるかを試している、と見るべきであろう。

（河合隼雄『「出会い」の不思議』）

(6)　まず都市についてみると、政治的・経済的あるいは社会的・文化的な中心機能と、その担い手としての消費人口の集中、あるいは家屋・建造物などの密集による都市的景観などが主要なメルクマール（指標）になると考えられる。そして、これらの条件を満たすものとして、まず第一に、地方政治都市としての国衙＝府中を挙げなければならない。

在庁官人制の成立と発展にともなって、一国における中心的機能を飛躍的に拡大した各国国衙は、一般に国衙の役人だけでも百人以上に達したといわれ、中世には等しく都市としての特徴を備えてくる。

出雲国の場合、それが「府中」として史料上に確認できるのは建長七年（千二百五十五）の出雲国司庁宣においてであり、そこでは惣社の供料を納めない在庁官人の府中からの「追放」が主張されている。出雲府中がすでにこれ以前から、一定の空間的領域をもつ都市的な場として機能していたことをうかがわせる。実態としての都市の成立は、平安末―鎌倉初期までさかのぼると考えてよいであろう。　（井上寛司『図説日本の歴史』）

６．まとめ

本稿の観察結果を箇条書きに整理し、本稿のまとめとしたい。

1. 客観的妥当性の判断を述べる「と言える」類に付加される「であろう」は、専門的検討を経たうえでの結論・主張であるという、話し手のスタンスを明示する文体的標識である。その使用により、専門家としての書き手のアイデンティティ、自己イメージを演出する効果も図れる。したがって、これを主張の抑制・断定回避を表す婉曲表現とするのは適切とは言えない。
2. 一方、「～と言える｛かもしれない／のではないだろうか／と思う／と思われる」などは、書き手の主張を控え目に述べる、婉曲表現としての機能・効果を有す。
3. 「～と言えると思う」は「～と言える｛であろう／だろう｝」と類義的だが、「と思う」は、個

人的な意見であることを表示するに留まり、専門家の意見というニュアンスは相対的に弱い。

4. 日常的な話しことばにおいても、「でしょう」に主張緩和のニュアンスは認めにくく、目下から目上には使いにくい。「ダロウ」は、知識・能力・社会的地位などにおいて、聞き手よりも上位にある話し手が、考慮・検討を加えたうえで、自らの見解や判断を述べる場合に使用されるものだからである。

参考文献

安達太郎（1997）「『だろう』の伝達的な側面」『日本語教育』95: 85-96　日本語教育学会

庵　功雄（2009）「推量の『でしょう』に関する一考察―日本語教育文法の視点から―」『日本語教育』142:58-68 日本語教育学会

石黒　圭（2007）『よくわかる文章表現の技術Ⅴ　文体編』明治書院

大鹿薫久（1993）「『だろう』を述語にもつ文についての覚書」『日本文藝研究』45(3): 20-34　関西学院大学

大鹿薫久（1995）「本体把握―『らしい』の説―」宮地裕・敦子先生古稀記念論文集刊行会編『宮地裕・敦子先生古稀記念論文集　日本語の研究』527-548　明治書院

大鹿薫久（2004）「モダリティを文法史的に見る」尾上圭介編『文法Ⅱ』（朝倉日本語講座 6）193-214　朝倉書店

奥田靖雄（1984）「おしはかり（一）『日本語学』3(12): 54-69

奥田靖雄（1985）「おしはかり（二）」『日本語学』4(2): 48-62

木下是雄（1981）『理科系の作文技術』（中公新書 624）中央公論社

高山善行（2014）「推量[3]」日本語文法学会編『日本語文法事典』331－332　大修館書店

中北美千子（2000）「談話におけるダロウ・デショウの選択基準」『日本語教育』107: 26-35　日本語教育学会

仁田義雄（1991）『日本語のモダリティと人称』ひつじ書房

仁田義雄（1992）「判断から発話・伝達へ―伝聞・婉曲の表現を中心に」『日本語教育』77: 1-13　日本語教育学会

仁田義雄（2000）「認識のモダリティとその周辺」『モダリティ』（日本語の文法 3）81-159　岩波書店

日本語記述文法研究会編（2003）『現代日本語文法 4　第 8 部モダリティ』くろしお出版

蓮沼昭子（1991）「ヨウダ・ラシイとダロウ―推量のムードの二類型―」吉田弥寿夫先生還暦記念論文集編集委員会編『日本語教育論集―日本語教育の現場から―』209-221　学習研究社

蓮沼昭子（2004）「認識的モダリティとレトリック―「のではないか」再考―」『日本語教育連絡会議論文集』Vol.16: 10-22〈http://www.nier.go.jp/saka/pdf/N16006010.pdf〉

益岡隆志（1991）『モダリティの文法』くろしお出版

益岡隆志（2007）『日本語モダリティ探究』くろしお出版

宮崎和人（1993）「『ダロウ』の談話機能について」『国語学』175: 40-53　国語学会

宮崎和人（2002）「第 4 章　認識のモダリティ」宮崎和人・安達太郎・野田春美・高梨信乃『モダリティ』（新日本語文法選書 4）121-171　くろしお出版

宮崎和人（2012）「認識的モダリティの意味と談話的機能」澤田治美（編）『モダリティⅡ：事例研究』（ひつじ意味論講座第 4 巻）101-120 ひつじ書房

宮崎和人（2014）「推量[1]」日本語文法学会編『日本語文法事典』326-328　大修館書店

三宅知宏（1995）「『推量』について」『国語学』183: 1-11 国語学会

三宅知宏（2010）「『推量』と『確認要求』―“ダロウ”をめぐって」『鶴見大学紀要』47（第一部国語・国文学編）9-55

森田良行（1980）『基礎日本語 2』角川書店（森田良行（1989）『基礎日本語辞典』角川書店に再録）

森山卓郎（1992ａ）「日本語における『推量』をめぐって」『言語研究』101: 64-83　日本言語学会

森山卓郎（1992ｂ）「文末思考動詞『思う』をめぐって―文の意味としての主観性・客観性―」『日本語学』11(9): 105-116　明治書院

森山卓郎（2000ａ）「基本叙法と選択体系としてのモダリティ」『モダリティ』（日本語の文法 3）3-78　岩波書店

森山卓郎（2000ｂ）「『と言える』をめぐって―テクストにおける客観的妥当性の承認―」『言語研究』118: 55-79　日本言語学会

田窪行則（2001）「現代日本語における 2 種のモーダル助動詞について」梅田博之教授古稀記念論文集編集委員会編『韓日語文学論叢』1003-1023　ソウル：太學社

ロゲルギスト K_2（1974）「『であろう』の背景」『自然』1974 年 1 月号 中央公論社（ロゲルギスト（2009）『新 物理の散歩道』ちくま学芸文庫に再掲載）

ワンプラディット・アパサラ・キク（2008）「可能性をなくした『かもしれない』」『京都大学言語学研究』27: 189-202

Leggett, A.J.（1966）Notes on Writing of Scientific English for Japanese Physicists.『日本物理学会誌』21(11): 790-805 日本物理学会

Takubo, Y.（2007）Two Types of Modal Auxiliaries in Japanese: Two Directionality in Inference. McGloin, N.H. and J. Mori (eds.) *Japanese/Korean Linguistics Vol.15*: 440-451. Stanford: CSLI Publications.

調査資料出典

国立国語研究所「現代日本語書きことば均衡コーパス」（BCCWJ）オンライン公開版

〈https://chunagon.ninjal.ac.jp/search#〉